

契丹小字文献所引の漢人典故[†]

大竹昌巳

1 はじめに

未知の文字・言語の解読にあたって重要な手がかりを提供してくれるのが対訳資料であり、特に音価を推定する上で有効な手がかりとなるのが対音資料である。契丹小字においては、契丹小字表記された漢語音がその役割を果たす資料の中で最も堅実な成果をもたらすものであり、契丹小字解読への重要な契機となった契丹文字研究小組¹⁾の一連の研究〔契丹文字研究小組 1977, 1978, 1985〕でも契丹小字文献中の漢語語彙の同定とそれに基づく音価推定が決定的な役割を果たした。

契丹小字文献中の漢語対音は契丹小字の解読に資してきただけでなく、一方では、他に利用可能な資料をほとんどもたない遼代漢語音を知る上でも貴重な資料であり、その上で契丹小字文献中の漢語語彙を同定し、収集、蓄積する作業は大切な意味をもつ。

ところで、契丹小字文献中に見られる漢語語彙には、主として、「開府儀同三司」「太子少師」といった中原官制に由来する職官名、「太祖聖元皇帝」「姚景禧」といった漢風人名や漢臣名、「奉聖州」「攢塗殿」といった地名、建物名、「毛詩」「論語」といった漢文典籍名があるが、その他に、「管仲」「堯舜」といった中国の歴史上、伝説上の人物名が見られることが即実〔2010〕等の研究によって明らかにされている。しかしながら、そのような人物名の中には未特定のものも少なからず存在し、前後の文脈も十分に理解されていない場合がある。

筆者の前稿〔大竹 2015b〕では、契丹小字墓誌中に見られる、漢文典籍の一節から翻訳引用された契丹文の典拠と文意を特定することで、語義や文法を明らかにすることを試みたが²⁾、本稿ではそれに引き続き、中国の故事に関わる人物名とその典故を特定することで、契丹語語彙や遼代漢語音の解明に資する資料の収集を図る。さらには、両稿を通じて、中原文化が遼代の契丹知識人にいかに受容されていたかを示す資料が提示できるものとする。

以下では、故事に関わる人物のおおよその年代順で取り上げるが、一連の文中で時代の異なる人物について言及することもあるため、全ての人物が正しい時代に配列されているわけではない。また、契丹語の読解は依然初歩的な段階にあり、文意が十分に理解できていない部分も多い。以下の読解は先行研究を踏まえた筆者の試読であり、今後のさらなる検証と修正が必要であることをお断りしておく。

[†] 本稿は JSPS 科研費（特別研究員奨励費 26・3830）の助成を受けた研究成果の一部である。

¹⁾ 内蒙古大学蒙古語文研究室の清格爾泰氏らと中国社会科学院民族研究所の劉鳳翥氏らが 1975 年に結成した研究グループ。

²⁾ 漢文典籍を利用して契丹語文法の一部を解明しようとしたものとして大竹〔2015d〕も参照。

2 周代以前

2.1 堯舜と禹湯

『道宗皇帝哀冊』〔乾統元年(1101)耶律固撰〕第22–23行には次のようにある：

- (1) 火女 困中舟伏 付矢³⁾ 又早九傘 了 方及羽 止早又
Ū-n bedelbeń, Tāŋ-en šul-ges ... al-ūǰ pul-er;
 禹-GEN 功³⁾ 湯-GEN ?-GS NEG できる-NPST.SG⁴⁾ 勝る-R⁵⁾
- 安考及女 又 又亦⁶⁾ 未关忝谷舟伏 付⁷⁾ 叔北尺羽 弁
Nāu⁰-n mā, Šün-en čišedbeń tār kē-luy-ūǰ qǔL.
 堯-GEN 大⁶⁾ 舜-GEN 孝⁷⁾ ? と言う-PASS-NPST.SG⁸⁾ ?

「禹の功、湯の××はできまい、超えることが；
 堯の大、舜の孝は××と言えよう、××。」

安考及 *Nāu⁰* が「堯」(LMC *ŋ^hiäü, OMC *iäü) に、又亦 *Šün* が「舜」(LMC *süēn, OMC *süēn) に当たることは即実 [1996: 55] がすでに指摘しているが⁹⁾、火 *Ū* が夏王朝の建国者とされる「禹」(LMC *üö, OMC *ü) に、付矢 *Tāŋ* が殷王朝の建国者である「湯」(LMC *t'āŋ, OMC *taŋ) に当たることは触れられていない。堯舜禹湯はいずれも儒教で聖人とされる君主である。

「禹の功」は言うまでもなく治水の功績を指し、「舜の孝」は自らを害せんとする父への盲目的なまでの孝行を言う。「堯の大」は『論語』泰伯篇の孔子のことばに依るらしい [ibid.]：

- (2) 子曰：「大哉，堯之爲君也！巍巍乎！唯天爲大，唯堯則之。」

「湯の *šulges*」については待考。

³⁾ /bedlbní/ 《功業，功績》は動詞語幹 /bedl-/ 《成し遂げる，(名声等を)成す》(← /bed-/ 《体》+ 他動詞派生接辞 /-l-/) に過去・形動詞接辞 /-br-/ の単数女性形 /-bní/ (/bní/ < /-br/ + /-ń/) を附したものである。ここでのように名詞的に機能する場合は単数女性形をとる。

⁴⁾ *V-r al-* はここでは(不)可能を表すようである(ここでは倒置が生じている)。形動詞 /-ūǰ/ は主節述語として用いられる場合、未実現の事態に対する話者の判断を表す [大竹 2015d: 352f]。

⁵⁾ /pul-/ 《勝る，超過する》 [呉英喆 2012: 22] (MMo. *hüile-* 《余る，残る，勝る》)

⁶⁾ /māv/ 《大きい.F》(語末の軟口蓋弱摩擦音 *v*, *β* は先行母音の引き伸ばし要素として実現するため，/māv/ → *mā* となる)。ここでは名詞的に用いているので単数女性形をとる。単数男性形は又及 *mō* (/moiv/)，複数形は又並冬 *mavas*。副詞形は又並大 *mavaǰ* 《大いに》。

⁷⁾ /čišdbní/ 《孝行な.F；孝》は /čišd-/ 《孝行する》(← /čiš/ 《親類》+ 動詞派生接辞 /-d-/) に過去・形動詞接辞 /-br-/ の単数女性形 /-bní/ を附したものである。『遼史』宮衛志上に「『孝』曰『赤寔得本』。」とある「赤寔得本」(OMC *či.ši.deǰ.büen) に当たる。

⁸⁾ /kē-/ 《…と言う》(MMo. *ke'e-* 《id.》)。-*luyǰ* (← 受動化接辞 /-lǰ-/ + 形動詞接辞 /-ūǰ/) は当為・可能を表す表現 [大竹 2015d]。

⁹⁾ 安考及 *ŋäü⁰* が「堯」に当たることは文脈から明らかであるが、安考及 <eŋ-äü-ü> という表記は漢語去声に専用される特殊な表記である(平上声であれば安考 *ŋäü* と書くのが通例) [沈鍾偉 2012]。しかし、「堯」は中古漢語でも古官話でも(陽)平声であり、ここでこのような表記を用いるのは奇用である。註 89) 参照。

2.2 巢許と夷齊

『耶律智先墓誌銘』〔大安 10 年 (1094) 耶律固撰〕の本文 (第 3 行以降) は次のように始まる：

(3)	雨企	水𠂔	𠂔考𠂔	𠂔亦𠂔	夷𠂔早丹伏	𠂔	𠂔夷	𠂔火
	<i>dōl</i>	...-ēr	<i>Njau¹⁰</i> ,	<i>Šün-en</i>	<i>üdü-l-beñ</i>	<i>när</i> ,	<i>Čäu</i> ,	<i>Kū</i>
	聞く .CNJ ¹⁰⁾	ある(?)-INST ¹¹⁾	堯	舜-GEN	?-PST.F ¹²⁾	日[F] ¹³⁾	巢	許
	𠂔火𠂔𠂔	尤安𠂔	𠂔化	𠂔𠂔九𠂔𠂔	𠂔	𠂔𠂔𠂔		
	<i>tauyēr-en</i>	<i>umurel</i>	<i>ir</i>	<i>serg-ēj</i>	<i>täb</i>	<i>tī-d-en</i>		
	廉潔な-ACC	第一とする.CNJ ¹⁴⁾	名 ¹⁵⁾	成す-PST.PL	五.M ¹⁶⁾	帝[M]-PL-GEN ¹⁷⁾		
	𠂔𠂔𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔𠂔	𠂔𠂔𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
	<i>nai-d-ērī</i>	<i>Vun</i> ,	<i>Vū-n</i>	<i>pūsuy^w-ēñ</i>	<i>ünē-nd</i>	<i>ī</i> ,	<i>Sī</i>	<i>qūLūd-beñ</i>
	臣-PL-ABL ¹⁸⁾	文	武-GEN	興る-PST.F ¹⁹⁾	?[F]-DAT	夷	齊	仁 ²⁰⁾
	𠂔𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔𠂔	𠂔𠂔				
	<i>talqaj-r</i>	<i>aldur</i>	<i>šad-lav-āj</i>					
	求める-R ²¹⁾	名声 ²²⁾	?-CAUS-PST.PL					

「〔撰者である私が〕聞いているところによると、帝堯、帝舜が××した日、巢父、許由は廉潔を第一として名誉を成した。五帝の臣下から〔周の〕文王、武王が興った××に、伯夷、叔齊は仁を求めて名声を成した。」

- ¹⁰⁾ *dōl* は /dōl-/ 《聞く》 (MMo. *du'ul-* 《id.》) [大竹 2015c: 91] と連結副動詞接辞 /-j/ の融合形。
- ¹¹⁾ 本文冒頭の 雨企 水𠂔 *dōl...ēr* は漢文墓誌の「伏聞」「恭聞」に対応する表現である [即実 2012: 63]。この後には、墓主を顕彰するための典故や、墓主とはもはやほとんど無関係な典籍からの引用が続く。このような典故の引用で始まるスタイルの墓誌銘は、遼代には多く見られる [福井 2013]。
- ¹²⁾ /üdü-l/ (語義未詳) は /üdü/ 《?》 + 他動詞派生接辞 /-l-/ と分析される。
- ¹³⁾ /när/ 《(曆の) 日, 昼間, 太陽》 (MMo. *nara(n)* 《太陽》)。『契丹国志』歳時雜記に「『捏離』是『日』。」とある「捏里」(OMC **niä.li*) に当たる (『類説』所引『燕北雜記』は「担里」に誤る)。
- ¹⁴⁾ *umurel* は /umr-l/ 《第一とする, 優先する》 (← /umr/ 《はじめ》 + 他動詞派生接辞 /-l-/) と連結副動詞接辞 /-j/ の融合形。
- ¹⁵⁾ /ir/ 《名前, 称号; 官職》 [劉鳳翥、于宝林 1981: 176f]
- ¹⁶⁾ 字素 𠂔 の音価 *täb* は、『蕭彥弼 (太山) 夫妻墓誌銘』〔寿昌元年 (1095)〕第 10 行の 𠂔𠂔 *Täbed* が『遼史』に見える人名「貼不」(LMC **t'äp.püet*, OMC **t'ä.bu*) に対応することから推定される。
- ¹⁷⁾ 「帝」(LMC **t'äi*, OMC **di*)
- ¹⁸⁾ /nai/ 《臣, 官》 [即実 1996: 12]。𠂔 穴 *jañ nai* 《百官》; 𠂔 穴 *qā nai* 《君臣》。-*ērī* は複数語幹に附く奪格接尾辞。単数語幹には -*ndī*, -*dī* が附く。
- ¹⁹⁾ /pūsuy^w-/ 《興る》。『遼史』卷 31 宮衛志上に「『興隆』曰『蒲速盪。』」とある「蒲速盪」(OMC *pu.su.uon*) に当たる。
- ²⁰⁾ *qūLūd-beñ* 《仁》は動詞語幹 /qūLūd-/ (L は何らかの流音) 《?》 (← /qūLū/ 《統率者 (都統、都部署)》 + 動詞派生接辞 /-d-/) に過去・形動詞接辞単数女性形 /bí/ を附したものの。
- ²¹⁾ /talqj-/ 《求める》 [大竹 2015b: 9f]。「仁を求める」という表現は『論語』述而篇の孔子の言をふまえている：「〔子貢〕入曰：『伯夷、叔齊何人也？』〔子〕曰：『古之賢人也。』曰：『怨乎？』曰：『求仁而得仁，又何怨？』」
- ²²⁾ /aldūr ~ aldur/ 《名声》 (MMo. *aldar* 《id.》)。『遼史』卷 73 耶律曷魯伝に「『阿魯敦』者，遼言『盛名』也。」とある「阿魯敦」(OMC **e.lu.duēn*) に当たる。

この2文に現れる8人はいずれも即実 [2010: 7f, 2012: 85f] がすでに正しく推定しており、附言することはない。漢字音と照らし合わせれば以下のようなになる（「堯」「舜」については重複するため省略）：

𠂔𠂔 <i>čāu</i> 「巢」 (LMC * <i>d̥zau</i> , OMC * <i>čau</i>)	𠂔𠂔 <i>kū</i> 「許」 (LMC * <i>xie</i> , OMC * <i>xü</i>)
𠂔𠂔 <i>vun</i> 「文」 (LMC * <i>ŋjüen</i> , OMC * <i>vüen</i>)	𠂔𠂔 <i>vū</i> 「武」 (LMC * <i>ŋjüö</i> , OMC * <i>vu</i>)
𠂔𠂔 <i>ī</i> 「夷」 (LMC * <i>jiēj</i> , OMC * <i>i</i>)	𠂔𠂔 <i>sī</i> 「齊」 (LMC * <i>dziäi</i> , OMC * <i>ci</i>)

ただ、即実 [2010, 2012] の文の解釈には問題があるため、ここで取り上げた次第である。

「巢許」は巢父と許由のことで、ともに高廉で知られた堯舜時代の伝説の隠者である。許由はその廉潔のゆえに堯が天下を譲ろうとしたが受けず、のちに堯がまた召して高官にしようとしたが聴き入れず、汚らわしい話を聞いて耳が汚れたとして川のほとりで耳を洗った。友人である巢父はその川で牛に水を飲ませようとしていたが、許由が耳を洗うのを見て、自分の牛の口が汚れてしまうとして上流に行って水を飲ませたという故事で知られる [[西晋] 皇甫謐『高士伝』等]。

「文武」は周王朝の創始者武王とその父文王であり、「夷齊」は孤竹国の王子伯夷と叔齊の兄弟である。伝説によれば、伯夷、叔齊はともに国王の位を譲り合って孤竹国を去り、文王の評判を聞いて周国に赴くも文王は死しており、息子の武王が殷の紂王を討伐しようとするところであった。伯夷、叔齊は父の葬儀も終わらぬうちの主君討滅を孝、仁にもとる行為として諫め、武王が殷を滅して周王朝を開いたのちは、周の粟を食むことを潔しとせず、餓死したとされる [[前漢] 司馬遷『史記』伯夷列伝等]。

巢許、夷齊はいずれも富貴を好まず清廉、仁義を貫いた隠遁者の代名詞である。

本墓誌銘の墓主耶律智先 (1023–94) は、彼の漢文、契丹文墓誌によれば、若い頃に興宗皇帝 (在位 1031–55) に召されて祇候郎君となったが、父母の老疾のため郷里に戻り、両親に孝行を尽くした。その後も入仕することがなかったため、彼の人生を巢許、夷齊のそれに喩えたのである。第18行には次のようにある：

(4) 𠂔𠂔 𠂔𠂔 𠂔𠂔 𠂔𠂔 𠂔𠂔𠂔𠂔 𠂔𠂔𠂔𠂔
Čāu Kū, Ī Sī čěj-ēr üry-ēr.
 巢 許 夷 齊 等-DAT²³⁾ 続く-PST.M

「(智先は) 巢許、夷齊らに連なった。」

3 春秋時代

3.1 鍾子期と鮑叔牙

『蕭忽突董墓誌銘』 [大安7年 (1091) 耶律司家奴撰] 第32行には次のようにある：

²³⁾ /čej/ 《…等》 [豊田 1991b: 20, 22]。čěj は /čē-/ 《する》 (MMo. *ki-* 《id.》) + 過去・形動詞接辞複数形 /-Vj/ と分析される可能性がある。cf. MMo. *ki'ed* 《…等》。-ēr は複数語幹に附く与位格接辞。単数語幹には -nd, -d が附く。

(5) ㄅ火 ㄅ谷 ㄨㄨ雨 ㄨㄨ ㄨㄨ
Jūŋ^w Sī kī-n āl ...-ēñ,
 鍾 子 期-GEN 音²⁴⁾ 知っている-PST.F²⁵⁾

ㄨㄨ ㄨㄨ ㄨㄨ ㄨㄨ ㄨㄨ ㄨㄨ
Bau^Q Šeu ŋā-n ...ū naij-ēñ-ēr
 鮑 叔 牙-GEN ? 仲良くする-PST.F-INST²⁶⁾

「鍾子期が音を知っていたこと、鮑叔牙が××友善であったことにより」

ㄅ火 ㄅ谷 ㄨㄨ *Jūŋ^w Sī-kī* は「知音」の故事で知られる「鍾子期」(LMC **tšioŋ^w.tsiēŋ.giēŋ*, OMC **jjuŋ.zi.ki*), ㄨㄨ ㄨㄨ ㄨㄨ *Bau^Q Šeu-ŋā* は「管鮑之交」で知られる「鮑叔牙」(LMC **bau.sjōk^w.ŋa*, OMC **bau.sü.ia*) であることが呉英喆 [2012: 50f] によって指摘されているが、前後の文脈は明らかにされていない。

鍾子期(名は徽。子期は字)は春秋時代の楚の人で、琴の名手伯牙の音楽をよく理解した話が『列子』湯問篇に見える。また、鍾子期という唯一無二の理解者を失った後、伯牙が琴を破り絃を絶って生涯二度と琴を弾かなかった話が『呂氏春秋』孝行覽・本味篇に伝わる。

鮑叔牙は春秋時代の齊の人で、後に叔牙に推挙されて桓公の宰相となり桓公を覇者にまで押し上げた管仲の親友である。管仲が「私を生んだのは両親だが、私を知っているのは鮑叔である。」と言うほどの仲であったことが『列子』力命篇や『史記』管晏列伝に伝わる。

墓誌の記載によると、墓誌撰者耶律司家奴と墓主蕭忽突董(1041-91)とは長年の親友であったらしく、上記の契丹文は両人の親密さを示すために引かれたものと考えられる。

なお、『蕭仲恭墓誌銘』[金天徳2年(1150) *Išger Jauquš* 撰]の第33, 47行には ㄨㄨ ㄨㄨ ㄅ火 ㄨㄨ *Gōn Jūŋ-un o..oboŋ* 《管仲の忠》として ㄨㄨ ㄨㄨ ㄅ火 *Gōn Jūŋ^w* 「管仲」(LMC **kuān.djōŋ^w*, OMC **guon.jjuŋ*) の名が見える [王弘力 1984: 68]。

また、『蕭忽突董墓誌銘』第16-17行には、漢王朝建国の功臣 ㄅ考 ㄨㄨ *Säu Qā* 「蕭何」(LMC **siäu.yā*, OMC **siäu.xe*) (?-前193) と ㄨㄨ ㄨㄨ *Jāŋ Lēŋ* 「張良」(LMC **tāŋ.liāŋ*, OMC **jaŋ.liāŋ*) (?-前186) および前漢末の学者 ㄨㄨ ㄨㄨ *Yaŋ Kēuŋ^w* 「揚雄」(LMC **jiāŋ.xiōŋ^w*, OMC **iaŋ.xiūŋ*) (前53-後18) と隋代の儒学者 ㄨㄨ ㄨㄨ *Oŋ^w Tūŋ^w* 「王通」(LMC **üāŋ.t'ōŋ^w*, OMC **uaŋ.tuŋ*) (584-617) の名が見える [呉英喆 2012: 48f]²⁷⁾ が、これらの人物が引用された意図は明確でない。

²⁴⁾ 「知音」の故事によって /āl/ が「音」の意味をもつことが分かる。他の文脈では「名声、評判」といった派生的意味で用いられることがある。

²⁵⁾ 動詞語幹 ㄨㄨ- が漢語「知」に対応する意味をもつことは沈匯 [1982: 96] や即実 [1991: 26, 27, 29] 等によって推測されているが、それらは「ㄨㄨ ㄨㄨ- *ui* ...-」《知〜事》、「ㄨㄨ ㄨㄨ- *deuŋ* ...-」《同知〜》のような役職を表す文脈で使用され、「管掌する、知(つかさど)る」を意味する。ここでは「知音」の故事によって、「理解する、知(し)る」という、より基本的な意味をもつことが確認でき、MMo. *mede* 《知る; 管掌する》と同義の語であることが分かる。しかしながら、字素 ㄨㄨ の音価は銘文中での押韻状況から *Cän* または *Cön* (*C* は未知の子音。ä, ö は男性母音) と考えられ、同源語とは考えがたい。

²⁶⁾ /naij-/ 《友善である、和睦する》 [即実 1991: 29, 1996: 65]

²⁷⁾ ただし、呉英喆 [2012] は *Yaŋ Kēuŋ^w* を隋文帝の族子揚雄(542-612)に比定するが、年代以外に王通との共通点を見出だし難い。儒学の大家という王通との共通項から、前漢の揚雄に比定すべきである。

3.2 顔回と冉耕

『耶律糺里墓誌銘』〔乾統 2 年 (1102) 耶律陳國奴撰〕第 22 行には次のようにある：

(6) 安斗天 凡_カ 來_カ 斗_カ 先_カ 文_カ 文_カ 全_カ 安_カ 丙_カ 女_カ 古_カ 月_カ 出_カ 全_カ 金_カ 北_カ
Nān *šī-n* *čāraq* *tū*, *Žēm* *Njēu-n* *mūdān* *sēmēl*
 顔 氏-GEN 短い²⁸⁾ 寿命²⁹⁾ 冉 牛-GEN 悪い.F³⁰⁾ 疾病³¹⁾

「顔氏の短命、冉牛の悪疾」

安斗天 凡 *Nān šī* 「顔氏」(LMC **ŋan.(d)ziēi*, OMC **jan.šī*) は顔回 (字は子淵), 文_カ 文_カ 全_カ 安_カ 丙_カ *Žēm Njēu* 「冉牛」(LMC **nīām.njēu*, OMC **ziām.iēu*) は冉耕 (字は伯牛) であり, とともに孔子の門弟である。兩人とも徳行が優れていたとされ, 孔門十哲に数えられる [『論語』先進篇]。

顔回は孔門七十二賢の第一に列せられる孔子最愛の弟子であるが, 不幸にも短命に終わったとされ (享年 41 という), その死に際して孔子は「天は予を喪^{われ}ぼせり！」と嘆いたという。顔回が短命であったという記述は『論語』に見える：

(7) 哀公問：「弟子孰爲好學？」孔子對曰：「有顔回者好學，不遷怒，不貳過。不幸短命死矣！今也則亡，未聞好學者也。」 【『論語』雍也篇】

冉耕の事績についてはほとんど記述がなく, 僅かに「悪疾」を患っていたことが知られる：

(8) 冉耕，字伯牛。孔子以爲有徳行。伯牛有悪疾，孔子往問之，自牖執手曰：「命也夫！斯人也而有斯疾，命也夫！」 【『史記』仲尼弟子列伝】

この二人は徳がありながら天寿を全うできなかった人物としてしばしば一組で言及される：

(9) 稱『易』積善有慶³²⁾，則有顔冉夭疾之凶。 【〔後漢〕荀悦『前漢紀』高后紀】

²⁸⁾ /čärq/ 《短い》 [即実 2012: 184]

²⁹⁾ /tū/ 《寿命》。cf. 先_カ *tūr* 《死去する》 (← /tū/ + 自動詞派生接辞 /-r-/)

³⁰⁾ /mūdān/ 《悪い.F》 [愛新覺羅 2004b: 116] (単数男性形は /mūdār/)。字素 古_カ の音価は長らく不明であったが, 近年発見された漢字、契丹小字『蕭叟墓誌銘』〔天慶 3 年 (1113)〕では人名 古_カ 月_カ 出_カ が「毛丹」(LMC **māu.tān*, OM **mau.dan*) と音写されており [吉如何 2015: 86], 遼朝で通用していた漢語では唇音を声母とする中古効撰一等韻 (豪韻 LMC **-āu*) の音価が [-u] であったとみられる [大竹 2015b: 7] ため, 字素 古_カ の音価は概略 <mud> と推定できる。唇音効撰一等韻が [-u] と読まれたことは漢字銘文の通押状況によっても支持される：『陳万墓誌銘』〔応曆 5 年 (955)〕では「都」(LMC **tūô*, OMC **du*)、³¹⁾ 「凶」(LMC **duô*, OMC **tu*)、³²⁾ 「烏」(LMC **uô*, OMC **u*)、³³⁾ 「毛」(LMC **māu*, OMC **mau*) が押韻し, 『祐唐寺創建講堂碑』〔統和 5 年 (987)〕では「宇」(LMC **üö*, OMC **ü*)、³⁴⁾ 「侶」(LMC **lje*, OMC **lii*)、³⁵⁾ 「宝」(LMC **pāu*, OMC **bau*)、³⁶⁾ 「古」(LMC **kuô*, OMC **gu*) が押韻しており, 中古模韻 (LMC **-uô*, OMC **-u*)、魚韻 (LMC **-ie*, OMC **-ii*)、虞韻 (LMC **-üö*, OMC **-ii*) と唇音豪韻 (LMC **-āu*, OMC **-au*) との相通が確認できる。

³¹⁾ /sēmēl/ 《疾病》 [王未想 1999: 79, 陳乃雄、楊傑 1999: 77]

³²⁾ 「積善之家，必有餘慶；積不善之家，必有餘殃。」【『周易』坤卦・文言伝】

(10) 冉牛與顔淵，下和³³⁾ 與馬遷³⁴⁾；或罹天六極³⁵⁾，或被人刑殘。

【〔唐〕白居易『詠懷』（『白氏文集』卷8所収）】

墓主 刃犬当 令丙刃 *Ūriyēn · T̄eur* (1061–1102) は 42 歳で病死しており，上記の引用句は墓主の病による早世を悼んだものと理解できる。

3.3 曾参と盗跖

『耶律兀没墓誌銘』〔乾統2年(1102)耶律司家奴撰〕第45行には 傘谷 火 *Zī ū* 「子輿」(LMC **tsi.ŋi.jiō*, OMC **zi.ü*) すなわち曾子(名は参，字は子輿)と春秋時代の盗賊 火及 友々 *Dau^o J̄ig* 「盗跖」(LMC **dâu.tsiäk*, OMC **dau.ji*) の名が見えることを即実 [2010, 2012: 310] が指摘している。

曾子には「曾参殺人」の故事がある。昔，曾参と同姓同名の者が人を殺したところ，ある人が誤って曾参の母に「曾参が人を殺した。」と告げたが，母は息子を信じて疑わなかった。しかし，一人，また一人と同じことを伝えたため，母は遂にこれを信じ，慌てふためいたという逸話である [『戦国策』秦策二]。

一方，盗跖は配下九千人を従えて天下を横行し，諸侯を侵暴したという伝説の盗賊で，『莊子』雜篇・盗跖篇では彼を非常に弁の立つ人物として描いており，説教を垂れにやってきた孔子をやりこめて這々の体で逃げ帰らせる。

墓主耶律兀没(1031–77)は契丹文墓誌および『遼史』耶律古昱伝によると，時の奸臣枢密使耶律乙辛、枢密副使蕭十三等の誣告によって命を奪われた。「子輿」「盗跖」は銘文中の一对の句中で用いられており，各句の意味は明らかでないが，即実 [2010, 2012] の言うように曾子は讒誣された墓主兀没を，盗跖は佞臣乙辛、十三らの喩えとして引用されたようである。

4 両漢代

4.1 冉耕、張禹、黄憲など

『耶律奴墓誌銘』〔寿昌5年(1099)耶律司家奴撰〕第46行には次の句がある：

(11) 文文全 安丙女 土安 傘金北 支火 火女 尙 止刃本
Žēm N̄eu-n eür sēmēl; J̄aŋ Ū-n ... p̄ar.
冉 牛-GEN 齡³⁶⁾ 疾病³⁷⁾ 張 禹-GEN 爵³⁸⁾ 禄³⁹⁾

³³⁾ 「完璧」の語源となった「和氏の璧」で知られる春秋時代の楚の人。山中で得た玉璞を楚の厲王、武王に献じたところ二度とも石と判定され，欺誑の罪で刑（あしきり）の刑に処されて両足を失った。

³⁴⁾ 司馬遷。匈奴に敗れ投降した李陵をかばったことで武帝の怒りを買って，腐刑（宮刑）に処された。

³⁵⁾ 「六極：一曰凶、短、折，二曰疾，三曰憂，四曰貧，五曰惡，六曰弱。」【『尚書』周書・洪範】

³⁶⁾ /eür/ 《年齢，歳》 [豊田 1990: 7]

³⁷⁾ 註 31) 参照。

³⁸⁾ 尙（語音未詳）《爵》 [大竹 2015b: 15]

³⁹⁾ /p̄ar/ 《封禄》。止刃本 止刃 *p̄ar pin* 《封戸（食邑）》。

主	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ
	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ	ㄨㄥˋ
<i>Qoŋ^w Kēn</i>	<i>ojoq-ond</i>	<i>tey-ēr;</i>	<i>Ləu Jīg</i>	<i>...obor</i>	<i>ā-r.</i>		
黄 憲	小さい.M-DAT ⁴⁰⁾	死ぬ-PST.M ⁴¹⁾	劉 焯	?	ある-PST.M ⁴²⁾		

「冉牛の年病(?)；張禹の爵禄 黄憲は早亡す；劉焯(?)は××あり」

このうち主 ㄨㄥˋ *Qoŋ^w Kēn* が「黄憲」(LMC **yuân.xiän*, OMC **xuän.xiän*) に、ㄨㄥˋ *Ləu Jīg* が「劉焯」(LMC **liəu.tsiäk*, OMC **liəu.jiäu*) に当たることを即実 [2010, 2012: 65] が推定している。ㄨㄥˋ *Žēm Nəu* が「冉牛」(冉伯牛) を指すことはすでに見た通りであり、残りの ㄨㄥˋ *Jaŋ Ū* は「張禹」(LMC **tāŋ.üö*, OMC **jiän.ü*) に比定できる。

張禹(?-前5)は前漢の朝臣で、成帝(在位前33-前7)の東宮時代に『論語』を教授した。成帝が即位すると帝の師であったことから尊重され、丞相にまで出世して爵禄を多く賜った〔後漢〕班固『漢書』張禹伝)。彼の名は「折檻」の故事で知られる。

朱雲という者が成帝に謁見し、「今の朝廷の大臣たちは主を匡すことも民を益することもできず、みな高位に居ながら職務も果たさず、ただ禄をむさぼっています。願わくば劍を賜り、佞臣一人を斬って他の者に示したく思います。」と述べた。「その佞臣とは誰か？」と帝が訊ねると、雲は「張禹です。」と答えた。激怒した帝は雲を死罪だとして連行させようとしたが、雲が宮殿の欄檻(欄干)につかまったため、欄檻が折れた。成帝は執り成しによって朱雲を許し、後に欄檻を修理する際、折れた部分分かるままにして直臣を表彰した、という逸話が『漢書』朱雲伝に伝わる。

黄憲は後漢の人で、貧しい牛医の子。孝廉に挙げられ、また公府に辟召されたが出仕せず、官に就くことなく48歳で卒した〔劉宋〕范曄『後漢書』黄憲伝)。彼は顔回に比せられ、時の論者がみな「顔回が蘇った。」と言ったという⁴³⁾。

卒年48は早世と言えるのか疑問ではあるが、白居易は顔回と並べてそのように詠んでいる：

(12) 顔回與黄憲，何辜早夭亡？；蝮蛇與鳩鳥⁴⁴⁾，何得壽延長？

【〔唐〕白居易『郊陶潜体詩十六首』(『白氏文集』卷5所収)]

劉焯(544-608)は隋の經学家、天文学家。即実 [2010, 2012] は上記 *Ləu Jīg* を劉焯に比定するが、ㄨㄥˋ *jīg* は「焯」(LMC **tsiäk*, OMC **jiäu*) と完全には音が合わないようであり、文脈も不明なため、この比定が正しいかどうかの判断は保留したい。

⁴⁰⁾ /oŋ^w/ 《小さい.M》 [即実 1994]

⁴¹⁾ /dey-/ 《死ぬ》 [劉鳳翥ほか 1995: 314]。「死ぬ、昇天する」は派生義で、原義は「上がる」と考えられる (cf. MMo. *de'ere* 《上に》, *de'egši* 《上へ》, *dege'ün* 《上を越えて》)。止考 今ㄨㄥˋ *päü tey-eley* 《表 (LMC **piäu*, OMC **biäu*) を上げる = 上表する》。又 今ㄨㄥˋ *när tey-ē-ndī čar* 《太陽が上より前に》。

⁴²⁾ *ār* は /ā-/ 《ある、いる》 (MMo. *a-* 《id.》) に過去・形動詞接辞単数男性形 /-ŋr/ が附加したもの。

⁴³⁾ 「黄憲，字叔度，汝南慎陽人。時論者咸云：『顔子復生。』」〔劉宋〕劉義慶撰、〔梁〕劉孝標註『世說新語』德行篇劉註所引〔魏〕魚豢『典略〕

⁴⁴⁾ 毒をもつとされる伝説の鳥。

墓主耶律奴 (1041–98) は、契丹文墓誌および『遼史』耶律奴妻蕭氏伝の記載によれば、大康 3 年 (1077) に北院枢密使であった耶律乙辛 (?–1083) が皇太子耶律濬 (1058–77) を死に追いやった際、誣告されて爵を奪われ、著帳に没入された。寿昌元年 (1095) に妻の上奏によって旧籍に復し、59 歳で病死した。

冉伯牛や黄憲を引いたのは墓主と同じく天寿を全うできなかったからであろう。張禹は佞臣の耶律乙辛を重ねたものと考えられる。

4.2 樊姫と馬后

『宣懿皇后哀冊』〔乾統元年 (1101) 耶律固撰〕第 19–20 行には次の 4 句がある：

- (13) 止为夫 凡初 北灯州 百空 丸 又刺券 又么余 本升及内
Pān šī-n o..oboǰ mē...; teu š...-ē šäv-äi arūb-ōñ.
 樊 氏-GEN 忠なる⁴⁵⁾ ? ? 称える-NPST.PL 善い-ACC⁴⁶⁾ 輔ける-PST.F⁴⁷⁾
- 又为 介女 全尤 全安刈又 斗本 几尺早券 寸岑 疋早立内出
Mā qau-n sum surubū; ār kuḡul-ē bayēr ǰaḡlav-āñ.
 馬 后-GEN 清い ? 唯だ⁴⁸⁾ ?-NPST.PL⁴⁹⁾ ? 断わる-PST.F⁵⁰⁾

「樊氏の忠××；××称えている、善行を輔けたことを
 馬後の清××；ただ××している、××辞したことを」

止为夫 凡 *Pān šī* 「樊氏」(LMC **fǔän.(d)ziēj*, OMC **fan.šī*) は春秋五覇の一人楚の莊王 (?–前 591) の夫人樊姫を、又为 介 *Mā qau* 「馬后」(LMC **ma.xeu*, OMC **ma.xeu*) は後漢明帝 (28–75) の皇后明德馬皇后を指すとみられる。ともに賢后として知られる。

樊姫の故事は〔前漢〕劉向『列女伝』賢明伝や〔前漢〕劉向『新序』雜事一等に見える。樊姫は狩獵を好んでやめようとしないうち、莊王に対して自ら鳥獸の肉を絶って諫め、それによって莊王は改心して政務に励むようになる。遅くまで朝政を聴いていた莊王が「飢えも疲れも忘れて賢者と語っていた。」と言うと、出迎えた樊姫は「賢者とは誰ですか。」と訊ねる。「宰相の虞丘子だ。」と答えると、樊姫が言うには、「虞丘子は賢いことは賢いのですが、忠ではありません。私は妻となってより、人を遣って賢い美女を探し求めさせ、王に推薦してきました。虞丘子は宰相となってより、未だかつて賢人を推薦してきたとは聞きません。賢人を知っていて推薦しないのは不忠です。」翌日、王が樊姫の言を虞丘子に告げると、虞丘子は宰相の職を辞任して孫叔敖を推挙してきた。孫叔敖を宰相として 3 年で莊王は覇者となったため、楚の史書には「莊王が覇者となったのは樊姫の力である。」とあるという。

⁴⁵⁾ /o..bǰ/ 《忠実な》[即実 2012: 63]。北与 *o..bej* とも綴る。

⁴⁶⁾ /šäv/ (ゼロ格形は 又斗 *šā*) 《善い.SG》。複数形は 又立亦 *šavad*。副詞形は 又立又 *šavaǰ*。MMo. *sayi(n)* 《id.》の同源語 [即実 1996: 266]。

⁴⁷⁾ /arb^w-/ 《輔ける》[愛新覚羅 2004b: 116]。『尚書』周書・蔡仲之命の「皇天無親，惟德是輔。」の「輔」の訳語として用いられる [大竹 2015b: 4–7]。

⁴⁸⁾ /ār/ 《惟だ…，独り…》[即実 2012: 61]

⁴⁹⁾ /kuḡ^w-/ (語義未詳) は /kuḡ^w-/ (ゼロ格形は 几 *kū*) 《人》+ 他動詞派生接辞 /-I-/ と分析される。

⁵⁰⁾ /ǰaḡlav⁻/ 《断る，辞する》(奪格要求)。又斗又 疋早立 *ir-endi ǰaḡlav-* 《官を辞する，致仕する》

明德馬后 (39–79) は伏波將軍馬援 (前 14–49) の末娘で、明帝に嫁いで皇后となった。馬后は質素儉約を好み、また過去の外戚による禍から学んで外戚への封爵を拒み、外戚勢力の専横を許さなかった [[劉宋] 范曄 『後漢書』明德馬皇后伝]。

また『宣懿皇后哀冊』第 21 行には、𠂔久 九又 *Dūg^w-gū* 「独孤」(LMC **dôk^w.kuô*, OMC **du.gu*) すなわち隋の文帝楊堅 (541–604) の皇后文献独孤皇后 (544–602) と 升矣 全矣 *Ĵāy-sun* 「長孫」(LMC **ĵāy.suēn*, OMC **ĵiay.suēn*) すなわち唐の太宗李世民 (598–649) の皇后文徳長孫皇后 (601–636) が挙げられている [即実 2010]⁵¹⁾ が、当該 4 句の意味は明確でない。

4.3 于公と虞経

『耶律敵烈墓誌銘』〔大安 8 年 (1092) 耶律固撰〕の本文 (第 3 行以降) は次のように始まる：

(14)	𠂔企	水矣	又么糸	𠂔化岑当	𠂔令	仲	𠂔文
	<i>dōl</i>	<i>...-ēr</i>	« <i>šāw-äi</i>	<i>čeuđ-ey-ēn</i>	<i>g^wē-d</i>	<i>...</i>	<i>yē</i>
	聞く.CNJ	ある-INST ⁵²⁾	善い-ACC	集まる-CAUS-PST.F	家[F]-DAT	必ず	ある.NPST.F
	止住非	捺	全存关	虫坐矣	几	国引	引行北关
	<i>püliüg^w</i>	<i>qūdūq^w.»</i>	« <i>ämär-ī</i>	<i>qārĭ-ēr</i>	<i>kū</i>	<i>bed=aq</i>	<i>qomor-ī</i>
	余りの.F	福[F] ⁵³⁾	?-ACC	?-PST.M	人 ⁵⁴⁾	?	成す-NPST.SG ⁵⁵⁾
							後の ⁵⁶⁾
	小升羽𠂔	𠂔𠂔	𠂔矣𠂔	𠂔全矣火	又𠂔伏	𠂔𠂔	九火矣
	<i>därüw-ūĵ-en.»</i>	<i>...-ei</i>	<i>Qān-en</i>	<i>keseŷel-d</i>	<i>š...-eñ,</i>	<i>Ū^q</i>	<i>guŷ-un</i>
	?-NPST.SG-ACC ⁵⁷⁾	?-CNJ	漢-GEN ⁵⁸⁾	世-DAT ⁵⁹⁾	称える-Ń	于	公-GEN
							邑里-GEN
	𠂔𠂔火	𠂔	又化谷𠂔	土𠂔	及子又	安矣𠂔	非木
	<i>...ā-nd</i>	<i>dureb</i>	<i>mir-d-en</i>	<i>terē</i>	<i>ō-ler.</i>	<i>Ŋui-n</i>	<i>pō-nd</i>
	門-DAT ⁶⁰⁾	四.M ⁶¹⁾	馬[M]-PL-GEN ⁶²⁾	車 ⁶³⁾	入る-PST.M ⁶⁴⁾	魏-GEN ⁶⁵⁾	時-DAT ⁶⁶⁾

⁵¹⁾ 即実 [2010] は「独孤」を唐代宗 (726–779) の妃貞懿独孤皇后に比定するが、該当句は 𠂔久 九又 全矣 矣矣 𠂔𠂔 *Dūg^w gū Suī-nd ūr-ley-ei* 《独孤 (皇后) は隋代に尊ばれて》と明確に隋代の人物であることを記しており、明らかに文献皇后を指す。

⁵²⁾ *dōl...ēr* については註 10), 11) 参照。

⁵³⁾ 以上の字句 (『周易』「積善之家，必有餘慶。」の契丹語訳) の解釈は大竹 [2015b: 1–4] を参照されたい。

⁵⁴⁾ /*kuŷ^w*/ (ゼロ格形は 几 *kū*) 《人》 [豊田 1986a: 15f, 1991a: 110]

⁵⁵⁾ /*qomr-*/ 《成す》 (より詳細な語義は待考)

⁵⁶⁾ /*orā*/ 《後の，後ろの》 [愛新覚羅、吉本 2011: 143]

⁵⁷⁾ *därüwūĵ* は動詞語幹小並-*därav-* (語義未詳) に非過去・形動詞接辞-*矣* *-ūĵ* が接尾した形式。*ämärī* 以下ここまでの文はおそらく漢文典籍からの引用とみられるが、原典、原文とも未詳。ただその意味するところは「積善之家，必有餘慶。」とほぼ同義であろう。

⁵⁸⁾ 「漢」 (LMC **xān*, OMC **xan*)

⁵⁹⁾ /*kesŷl*/ 《世，代》 [即実 2012: 265]

⁶⁰⁾ /*...ā*/ 《門戸》。乃全 𠂔𠂔 *ams...ā* 《疆場 (国ざかい)》。

⁶¹⁾ 字素 𠂔 の音価 *dur(e)b* は、『耶律兀没墓誌銘』第 4 行の 𠂔又 *Durber* が『遼史』に見える人名「突呂不」 (LMC **duēt.lię.püet*, OMC **du.lü.bu*) に対応することから推定できる。

⁶²⁾ /*mir*/ 《馬》 (MMo. *mori(n)* 《id.》) [契丹文字研究小組 1977: 64]

⁶³⁾ /*tery*/ (ゼロ格形は 土𠂔 *terē*) 《車，乗り物》 (MMo. *terge(n)* 《id.》)。又 土𠂔 *tum terē* 《万乘 (天子)》

生月生空伏	安火 火同女	丹力关	丹力 泰	火同空和	止尙矢	
<i>lābd-eń,</i>	<i>Njū</i>	<i>Kiŋ-un(!)</i>	<i>bāq-ī</i>	<i>bāq ...</i>	<i>kiŋ-d-en</i>	<i>püim-end</i>
評する-ń ⁶⁷⁾	虞	經-GEN ⁶⁸⁾	子-GEN	子 ⁶⁹⁾	九.M 卿[M]-PL-GEN ⁷⁰⁾	官品-DAT ⁷¹⁾
火央空半又	又 火矣	來尙	北九矢	令冬国	五九半空百	
<i>kui-d-ler.</i>	<i>er kib</i>	<i>č...</i>	<i>...g-end</i>	<i>tasbed</i>	<i>...g-leŋ-eĭ</i>	
至る-?-PST.M ⁷²⁾	?	いずれも ⁷³⁾	正しい ⁷⁴⁾	文字-DAT ⁷⁵⁾	?	記す-PASS-CNJ ⁷⁶⁾
///////矢	火早丹羽空	止及子尙	由又和	央火	又尙矢	
[]-end	<i>daŋ-lũb-ũjed</i>	<i>põl-beĭ.</i>	<i>beler-en</i>	<i>au-ĭ</i>	<i>erē-nd</i>	
	-DAT 見る-PASS-NPST.PL ⁷⁷⁾	なる-PST.PL ⁷⁸⁾	古い-ACC ⁷⁹⁾	取る-CNJ ⁸⁰⁾	今-DAT ⁸¹⁾	
亦伏	又化	半和	令冬五乃	国半丹伏火	九 止不矢	
<i>ün-eń,</i>	<i>ūd</i>	<i>aĭ-n</i>	<i>tasavam</i>	<i>bedel-beń-ēr</i>	<i>teŋ pon-end</i>	
?-ń	上の ⁸²⁾	父-GEN ⁸³⁾	?	成し遂げる-PST.F-INST ⁸⁴⁾	?	子孫-DAT ⁸⁵⁾
百空火	央早五才又	北:	今丹 九火 丹又	叔北又羽		
<i>mē...-ēr</i>	<i>au-lav-aler.</i>	...	<i>Säŋ</i>	<i>guŋ^w</i>	<i>bū</i>	<i>kē-lu-uj.</i>
?-INST	取る-PASS-PST.M	?	相	公 ⁸⁶⁾	である ⁸⁷⁾	と言う-PASS-NPST.SG ⁸⁸⁾

64) /ō-/《入る》(MMo. *oro*-(?)《id.》)。九丙火矢 及- *gëuŋ-und* ō-《宮 (LMC **kjōŋ^w*, OMC **guŋ*) に入る = 入宮する》, 关火矢 及- *irend* ō-《官職に就く》。

65) 「魏」(LMC **güčĭ*, OMC **učĭ*)

66) /pō/《時》(MMo. *hon*《年》)[Hambis 1953: 125, 契丹文字研究小組 1977: 64]。『類説』卷5所引『燕北雜記』に「『討』是『時』。」とある「討」(OMC **pūō*)に当たる。

67) /lābd-/《評する》(← /lāb/《評判》+ 動詞派生接辞 /-d-/)。

68) 火同 *kiŋ* の属格形は 火同和 *kiŋ-en* とあるべきである。誤刻か。

69) /bāq/《子》(WMo. *baŋa*《小さい》), *bāq-ī bāq*《孫 (子の子)》[即実 1988, 豊田 1986b]。

70) 「卿」(LMC **k'iaŋ*, OMC **kičĭŋ*)

71) /püim ~ pim/《官品, 品階》(漢語「品」(LMC **p'iem*, OMC **pičĭn*) の借用語)[大竹 2015b: 15]

72) /kui-d-/ は動詞語根 /kui-/《至る》(MMo. *kür-*《id.》)に機能未詳の動詞接辞 /-d-/ が附加されたもの。

73) /kib/《いずれも, すべて》[愛新覚羅 2004a: 139, passim]

74) /č.../《正しい》[愛新覚羅 2004c: 8, passim]。來尙 百 九 *č... mē kū*《正妻, 正室》

75) /...g-/《字, 文》[契丹文字研究小組 1977: 66]

76) /...g-/《記す》。公尙矢 五九半 *nār-end ...g-čĭ*《墓誌 (lit. 墓に誌したもの)》

77) /daŋ-/《見る》[吳英喆 2012: 262]

78) /bōl-/《…になる》[契丹文字研究小組 1977: 74] (MMo. *bol-*《id.》)[大竹 2015c: 92]

79) /belr/《古い, 昔の》[大竹 2015b: 11f]

80) /au-/《取る, 選び取る》(MMo. *ab-*《id.》)[宝玉柱 2005: 131f]

81) /erē/《今》(MMo. *edü'e*《id.》)[豊田 1985, 大竹 2015c: 88]

82) /ūd/《上の》(← 又女 /ün/《上に; 上 (= 皇帝)》+ /-d/ (MMo. *-dU*: 時位詞を形容詞化する接辞 [Takeuchi 2015])). 又化 九同 *ūd giŋ*《上京 (地名)》

83) /aĭ/《父; 男の》[即実 1988: 57]。又化 半 *ūd aĭ*《先祖》

84) 註 3) 参照。

85) /pon/《子孫, 後裔》[愛新覚羅, 吉本 2011: 141]

86) 「相公」(LMC **sjaŋ.kōŋ^w*, OMC **sjaŋ.guŋ*)。同中書門下平章事の官位を有する墓主耶律敵烈を指す。

87) 大竹 [2015b: 5] 参照。

88) 本来あるべき綴りは 叔北只羽 *kēluŋuĭ*。註 8) 参照。

「〔撰者である私が〕聞いているところによると、『善を積んだ家には必ずある、余慶が。』『××を××した者は××成す、後××を。』と。漢の世に称えるに、于公の里門には駟馬車が入った。魏の時に評するに、虞経の孫は九卿の官品に至った。ともに正史に××記載されて××に見られるようになった。古（故事）を以て今に喩えるに、先祖が××成したことによって後代に××を以て擢用された。すなわち相公（耶律敵烈）のことであると見えよう。」

一橋大学大学院生の李思齊氏の教示により、ㄨㄨ ㄨㄨ \bar{U}^0 *guŋ*^w を「于公」(LMC * $\ddot{u}ö.kôŋ$ ^w, OMC * $\ddot{u}.guŋ$) に、ㄨㄨ ㄨㄨ *Nü Kŋ* を「虞経」(LMC * $\eta\ddot{u}ö.k'j\ddot{a}ŋ$, OMC * $\ddot{u}.gi\ddot{e}ŋ$) に比定する⁸⁹⁾。

于公は前漢の丞相于定国 (?-前 4) の父で、県の獄吏や郡の決曹（裁判官）を務めた。その裁きは公平で、判決を受けた者はみな恨むことがなく、郡中では生きていうちから祠を立てて彼を祀った。于公の住む里の門（閭門）が壊れ、父老たちがそれを修理しようとした時、于公が言うには、「閭門を少し高く大きくして、駟馬高蓋車⁹⁰⁾が入るようにしてください。私は獄吏としてたくさんの陰徳⁹¹⁾を積み、誰かを冤罪に陥れたこともありません。子孫には必ずや栄達する者があるでしょうから。」果たして于公の言った通り、子の定国は丞相に、孫の永は御史大夫になって列侯に封ぜられ、世々語り伝えられた [[後漢] 班固『漢書』于定国伝]。

虞経は後漢の尚書令虞詡 (?-137) の祖父で、郡県の獄吏であり、公正に法を執行して寛恕の心をもって務めを果たした。虞経が言うには、「于公は里門を高くして、その子定国は遂に丞相にまで至った。私は罪を決すること 60 年、于公には及ばずも遠からずであろう。子孫はどうして必ず九卿⁹²⁾にならないことがあるか。」そこで虞詡の字を升卿（卿に升る）と名付けた [[劉宋] 范曄『後漢書』虞詡伝]⁹³⁾。

上記の于公、虞経の故事や『易』の「積善之家，必有余慶」は、墓誌が言うように、先祖の善行によって子孫が栄達の恩恵に与ることの喩えとして引用されたものである。そして、墓主耶律敵烈はまさにそのような家に生まれた人物であると墓誌は評する。

墓主の 4 世祖耶律吼 (911-949) は、本墓誌銘および『遼史』耶律吼伝の記載によると、太宗 (在位 927-947)、世宗 (在位 947-951) の二帝に仕え、七賢の一人に数えられた。太宗朝で南院大王となり、太宗の南伐に従軍して後晋を滅ぼし、功により採訪使を加えられた。その帰途太宗が崩ざると軍中で北院大王耶律洼と議って世宗を擁立し、世宗が即位すると「(褒賞を) 望みのままに取れ」と言われ、曾祖父匣馬葛の兄蒲古只ら三族が太祖の伯父釈魯を殺害した廉で籍没されてその子孫が著帳郎君となっていたのを、免じて原籍に復すよう申し出て許された。

⁸⁹⁾ 註 9) で見たのと同じく、「于」は中古漢語でも古官話でも (陽) 平声であるにも関わらず、ここでは去声特殊表記が用いられている。本墓誌の撰者である耶律固が撰じた墓誌銘にはこの他にも去声特殊表記の奇用がある：『耶律弘本妻蕭氏墓誌銘』第 4 行の ㄨㄨㄨ $Sŋ^0$ 「齊」(LMC * $dzi\ddot{a}i$, OMC * ci 陽平)；『道宗皇帝哀冊』第 6 行の ㄨㄨㄨ $y\ddot{e}u^0$ 「遊」(LMC * $ji\ddot{e}u$, OMC * $i\ddot{e}u$ 陽平)；『耶律高十墓誌銘』第 16 行の ㄨㄨ $d\ddot{u}^0$ 「都」(LMC * $t\ddot{u}ô$, OMC * du 陰平)。

⁹⁰⁾ 高い覆いのついた四頭立ての馬車。高位高官者が乗車を許された。

⁹¹⁾ 人に知られないところで積んだ徳。「有陰徳者，必有陽報；有陰行者，必有昭名。」【『淮南子』人間訓】

⁹²⁾ 中央政府の主要官庁（太常、郎中令、衛尉、太僕、廷尉、大鴻臚、宗正、司農、少府）の長官の総称。

⁹³⁾ 虞詡が実際に九卿に任じられたという記録は史書に見えない。

墓主耶律敵烈 (1026–92) の曾祖父、祖父とともに大王になる命を聞いていながら就任することなく死去し、敵烈に至って遂に六院大王 (南院大王) となった。敵烈は大王や上京留守等の官職を歴任して 62 歳で致仕し、一品の俸を賜い、車に乗って郷里に帰って 67 歳で死去した。

墓誌銘第 28 行は、吼の功業や敵烈の官職が于公の業績や虞詡の官職に比して勝っていたと賞賛している：

- (15) 今采 止杰不 育为亦 又为去全 夫中並出 火火 九火女 采本
Sai poŋ-on qarā-d šāl-ed an-lav-añ Ū⁹⁴ guŋ-un čar
 採 訪-GEN⁹⁴⁾ 著帳-PL 郎君-PL⁹⁵⁾ 免じる-CAUS-Ń⁹⁶⁾ 于 公-GEN 以前に⁹⁷⁾
- 国中丹伏矢关 止住非 又丹 九火女 小引本关 关九矢
bedel-beñ-endī pülüg^w. Säŋ guŋ-un dār qar-ī īr-end
 成し遂げる-PST.F-ABL⁹⁸⁾ より良い.F⁹⁹⁾ 相 公-GEN 迭刺の.M-GEN¹⁰⁰⁾ 官職-DAT¹⁰¹⁾
- 及子伏 爻安 爻同和 北为夫 夫早並才伏矢关 火夷
ō-leñ [Š]jeŋ kiŋ-en orān au-lav-aleñ-endī ūd.
 入る-PST.F¹⁰²⁾ 升 卿-GEN¹⁰³⁾ 後に¹⁰⁴⁾ 取る-PASS-PST.F-ABL¹⁰⁵⁾ ?

「吼採訪が著帳郎君を免じさせたのは于公が曾て成し遂げたことより勝っている。敵烈相公が南院大王の官職に就いたことは升卿 (虞詡) が後に擢用されたことより××。」

5 唐代

5.1 房玄齡、杜如晦、魏徵

契丹小字『耶律仁先墓誌銘』〔咸雍 8 年 (1072) *Yärüld Demēñ* 撰〕第 16 行には興宗御製の而公 九夷 *g^wēn gau* 「官詔」(LMC **kuān.kāu*, OMC **guon.gau*) [即実 1991: 28] の一部として次の文が引用されている：

- ⁹⁴⁾ 「採訪」(LMC **ts'āi.fūāŋ*, OMC **cai.fañ*) 《採訪使》。耶律吼を指す。
⁹⁵⁾ /šāl/ 《郎君》[契丹文字研究小組 1978: 377]。『遼史』卷 116 国語解に「沙里，郎君也。」，〔宋〕余靖『武溪集』卷 18 契丹官儀に「其未有官者呼舍利，猶中國之呼郎君也。」，〔南宋〕李燾『統資治通鑑長編』卷 20 所引江休復『雜誌』に「契丹國中，親近無職事者呼爲舍利郎君。」とある「沙里」(OMC **ša.li*)，「舍利」(LMC **šā.liēi*) に当たる。
⁹⁶⁾ /an-/ 《免ずる，許す》(奪格要求)。
⁹⁷⁾ /čar ~ čār/ 《先に，以前に》[契丹文字研究小組 1985: 592]。cf. 尙先 *čārd* 《先の，以前の》
⁹⁸⁾ 註 3) 参照。
⁹⁹⁾ /pülüg^w/ 《余りの.F，より良い.F》[愛新覺羅 2004b: 116]。単数男性形は 止平久 *pulug^w*。副詞形は 止平久羽 *puluguŋ* 《より，とても》。MMo. *hüle'ü* 《id.》の同源語 [Wu & Janhunen 2010: 141f]。
¹⁰⁰⁾ /dārqr/ 《迭刺 (部) の.M》(← /dārqr/ 《迭刺 (部名)》(OMC **dā.la*) [宝玉柱 2006: 8] + /-r/ (固有名に附いて形容詞化する接尾辞))。転じて「迭刺部長 (北南院大王)」を指す [即実 2012: 33]。
¹⁰¹⁾ 註 15) 参照。
¹⁰²⁾ 註 64) 参照。
¹⁰³⁾ 「升卿」(LMC **šieŋ.k'äŋ*, OMC **šieŋ.kieŋ*)
¹⁰⁴⁾ /orān/ 《後に，後ろに》cf. 北为亦 *orād* 《後の，後ろの》
¹⁰⁵⁾ 註 80) 参照。

- (16) 由爻 朶考爻安 羽朶 止朶 巾爻 安爻关 色 公朶化止爻引爻
beler Čäuqür ujen Pūŋ^w, Dū^Q, Nui^Q qūreb nair-av-qlq-an
 古の¹⁰⁶⁾ 漢人の.M¹⁰⁷⁾ 中¹⁰⁸⁾ 房 杜 魏 三.M 治まる-CAUS-LG-ACC¹⁰⁹⁾
- 尤安止 □□ 朶朶止朶止朶 爻公 八朶爻火 朶朶朶
umurel ... äld-lav-ā. erē-n keseyel-d bär-en
 第一とする.CNJ¹¹⁰⁾ 伝える-PASS-NPST.PL¹¹¹⁾ 今-GEN¹¹²⁾ 世-DAT¹¹³⁾ ?-GEN
- 北爻 朶爻关 几火伏 朶爻 今兩伏 朶爻久 丕 朶关朶谷朶伏
qūrj ...er-ī Kūŋuñ Qarū, Sineñ Lubug^w jureb čīšedbeñ
 ?¹¹⁴⁾ 契丹の.M-GEN¹¹⁵⁾ PN PN PN PN 二.M 孝¹¹⁶⁾
- 又止冬爻 朶安 止早爻朶
tavas-ēr aldur pul-ēj.
 大きい.PL-INST¹¹⁷⁾ 名声¹¹⁸⁾ 勝る-PST.PL¹¹⁹⁾

「昔の漢人の中では房玄齡、杜如晦、魏徵の3人が治を第一として××を伝えられている。当世では××の××契丹の *Kūŋuñ・Qarū* (耶律曷魯)、*Sineñ・Lubug^w* (耶律魯不古) の2人が孝の大なるを以て名声勝った。」

これに対応する文が漢字『耶律仁先墓誌銘』〔趙孝嚴撰〕第14行に見える：

- (17) 興宗皇帝親宣制曰：「唐室之玄齡、如晦，忠節僅同；我朝之信你、空寧，壯猷宜此。」

漢文墓誌の記述からも明らかなように、止朶 *Pūŋ^w* 「房」(LMC *vūāŋ, OMC *faŋ) は唐太宗朝の尚書左僕射房玄齡(玄齡は字。名は喬)(579–648)を、巾爻 *Dū^Q* 「杜」(LMC *duô, OMC *du) は同じく尚書右僕射の杜如晦(585–630)を指す。「房杜」と並び称された名宰相である。安爻关 *Nui^Q* 「魏」(LMC *ŋüēj, OMC *uej) は太宗の諫臣として名高い魏徵(580–643)を指す。この3人は太宗李世民(在位 626–649)に仕え、後代に模範とされた貞観の治を支えた名臣としてあまりにも有名である。

¹⁰⁶⁾ 註 79) 参照。

¹⁰⁷⁾ /jāuq^wr/ 《漢(人)の.M》[愛新覺羅 2003: 144f]。

¹⁰⁸⁾ /ujn/ 《内に、中に》[趙志偉、包瑞軍 2001: 38]。cf. 羽朶 *ujed* 《内の、中の》

¹⁰⁹⁾ /nair-/ 《治まる》; /nairv-/ 《統治する、治療する》(/nair-/ の他動詞形)

¹¹⁰⁾ 註 14) 参照。

¹¹¹⁾ /äld-/ 《伝える》(← /äl/ 《音、声》(註 24) 参照) + 動詞派生接辞 /-d-/。

¹¹²⁾ 註 81) 参照。

¹¹³⁾ 註 59) 参照。

¹¹⁴⁾ 固有名 朶 《契丹》を形容する語。

¹¹⁵⁾ 朶爻 /...r/ 《契丹の.M》[劉鳳翥 1983: 256–259]

¹¹⁶⁾ 註 7) 参照。

¹¹⁷⁾ 註 6) 参照。

¹¹⁸⁾ 註 22) 参照。

¹¹⁹⁾ 註 5) 参照。

一方、*Kūquń · Qarū* と *Sineń · Lubug^w* は『遼史』の言う耶律曷魯と耶律魯不古である。

耶律曷魯 (872–918)¹²⁰⁾ は太祖耶律阿保機 (在位 907–926) に仕えて遼朝建国の功業を支え、*uy^wē* 「于越 (OMC *ü.üö)」の称号を加えられた功臣である。耶律魯不古¹²¹⁾ は太祖に仕えて「契丹国字」の創製に功があり、のちに于越の称号を授けられた¹²²⁾。

愛新覚羅 [2009: 210f] は上記の人名を全て正しく比定しているが、文全体の解釈を提示していないため、ここで取り上げた次第である。

6 おわりに

以上、契丹小字文献には堯舜の時代から唐代に亘る多くの漢人典故が見出されることを見て、併せて前後の契丹文の読解を試みた。

撰者に注目すると、耶律固と耶律司家奴が特に漢人典故を引くのを好んでおり、両人はまた、大竹 [2015b] で見た漢文古典籍を好んで引用する人物でもある。少なくとも彼らは漢文学の素養を一定程度もっていたと言える。もっとも、契丹小字文献はそのほぼすべてが墓誌銘であり、そもそも墓誌銘という文化自体が中原に由来し、その形式は明らかに漢文のそれを模倣している以上、撰者が漢文学の素養をもっているであろうことは当然予想されることではある。

最後に、遼朝での中国文学の受容という点について少し述べたい。

康鵬 [2015] は、遼代の漢文墓誌『耶律承窺妻蕭烏盧本墓誌銘』〔大安 7 年 (1091) 無名氏撰〕 (内蒙古自治区赤峰市巴林左旗の韓匡嗣家族墓から出土) が白居易 (772–846) の作品集である『白氏文集』 (『白氏長慶集』とも) 〔会昌 5 年 (845) 完成〕に所収の『唐河南元府君夫人滎陽鄭氏墓誌銘』〔元和 2 年 (807) 撰〕 (白居易の親友元稹 (779–831) の母の墓誌銘) の誌文の模倣であることを示して遼朝内における『白氏文集』の流布と受容を見事に例証した。しかし、このことはあくまでも遼朝内の漢人 (漢語話者) が白居易の文章を受容していたことを示すのみであって、遼朝の契丹人が白居易の文章を受容していたことの例証とはならない。

ほぼ時を同じくして、大竹 [2015b: 10–13] は複数の契丹小字墓誌に、『白氏文集』所収の『祭微之文』〔大和 5 年 (831) 撰〕 (元稹の死を悼んだ祭文) に引く『毛詩』 (『詩経]) の一節が翻訳引用されていることを明らかにした¹²³⁾。

その『祭微之文』の一節とは次のものである：

¹²⁰⁾ 「耶律曷魯，字控溫，一字洪隱，迭刺部人。祖匣馬葛，簡憲皇帝兄。」【『遼史』耶律曷魯伝】。名「曷魯」 (OMC *xe.lu) は *Qarū* の，字「控溫」 (OMC *kuŋ.uěŋ)、「洪隱」 (OMC *xuŋ.iěŋ)、「空寧」 (OMC *kuŋ.niěŋ) は *Kūquń* の音訳。

¹²¹⁾ 「耶律魯不古，字信寧，太祖從姪也。」【『遼史』耶律魯不古伝】。名「魯不古」 (OMC *lu.bu.gu) は *Lubug^w* の，字「信寧」 (OMC *siěŋ.niěŋ)、「信你」 (OMC *siěŋ.ni) は *Sineń* の音訳。

¹²²⁾ 『遼史』耶律魯不古伝はこの *Sineń · Lubug^w* と耶律吼の父 *Saravań · Lubug^w* との事績を混同しているようであり、魯不古伝が伝える西南辺大詳穩となって党項討伐で功を挙げたという事績は、『耶律敵烈墓誌銘』によれば *Saravań · Lubug^w* のものである。ただし、『遼史』太宗紀会同 5 年 (942) 条の「詔以明王隈恩 [=太祖の弟安端] 代于越信恩爲西南路招討使以討之 [=吐谷渾]。」によれば、*Sineń · Lubug^w* は西南路招討使となって吐谷渾を討ったという非常に似た経歴をもつ。

¹²³⁾ 大竹 [2015b] では 2 件の契丹小字墓誌 (『耶律仁先墓誌銘』〔咸雍 8 年 (1072) 撰〕および『蕭知微墓誌銘』〔乾統 7 年 (1107)〕) で同一箇所が引用されていることを明らかにしたが、その後さらに『蕭郭哥妻耶律氏墓誌銘』〔大康 4 年 (1077) 撰〕にも同一箇所が引用されていることを明らかにした。大竹 [2015d: 352] 参照。

(18) 『詩』云「淑人君子，胡不萬年？」又云「如可贖兮，人百其身。」

これは曹風・鳩鳴の「淑人君子，正是國人；正是國人，胡不萬年？」と秦風・黃鳥の「如可贖兮，人百其身。」という『毛詩』の2篇の詩を典拠とするもので、この2篇がこのような形で引用されているのは白居易の『祭微之文』を措いて他にないであろう。ゆえに上記の文が複数の契丹文墓誌に引用されていることは、契丹人知識階級に『白氏文集』が広く流布し受容されていたことを例証するものとなる。本稿に関して言えば、(11)の契丹文に(12)の白居易の詩文が影響を与えた可能性が挙げられる。

中国本土だけでなく日本、朝鮮等周辺諸国でも愛好された白居易の文章であるが、契丹でもそれは例外ではなかったのである。

略号

〈言語〉

MMo. 中期モンゴル語 / LMC 後期中古漢語 / OMC 古官話漢語 / WMo. モンゴル文語

〈グロス〉

ABL 奪格 / ACC 対格 / CAUS 使役 / CNJ 連結 / DAT 与位格
/ F 女性 / GEN 属格 / INST 造格 / M 男性 / NEG 否定 /
NPST 非過去 / PASS 受動 / PL 複数 / PST 過去 / SG 単数

参考文献

- 愛新覺羅烏拉熙春. 2003. 遼金史札記. 『立命館言語文化研究』15(1): 135–152.
愛新覺羅烏拉熙春. 2004a. 『契丹語言文字研究』京都：東亜歴史文化研究会.
愛新覺羅烏拉熙春. 2004b. 契丹蒙古札記. 『遼金史与契丹女真文』京都：東亜歴史文化研究会, pp. 103–126.
愛新覺羅烏拉熙春. 2004c. 永清郡主与太山將軍世系考 ——兼論国舅別部大小翁帳之族属. 『東亜文史論叢』2004: 1–36.
愛新覺羅烏拉熙春. 2009. 「李董与德実」与「空寧曷魯」. 『愛新覺羅烏拉熙春女真契丹学研究』京都：松香堂書店, pp. 203–211.
愛新覺羅烏拉熙春、吉本道雅. 2011. 『韓半島から眺めた契丹・女真』京都：京都大学学術出版会.
宝玉柱. 2005. 契丹小字 183 号 227 号原字研究. 『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』2005(2): 130–136.
宝玉柱. 2006. 契丹小字 ㄩ 及其替换字研究. 『内蒙古大学学报（人文社会科学版）』2006(1): 8–12.
陳乃雄、楊傑. 1999. 烏日根塔拉遼墓出土的契丹小字墓誌銘考积. 『西北民族研究』1999(2): 72–88.
福井敏. 2013. 遼代出土誌文小考. 『真宗総合研究所研究紀要』32: 301–314.

- Hambis, Louis. 1953. Premier essai de déchiffrement de la langue khitan. *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 97(1): 121-134.
- 吉如何. 2015. 關於若干契丹字的讀音. *Altai Hakpo* 25: 85-91.
- 即実. 1988. 從 奚 丹 𐰺 說起. 『內蒙古大學學報 (哲學社會科學版)』1988(4): 55-69.
- 即実. 1991. 《虬隣墓誌》積讀述略. 『東北地方史研究』1991(4): 24-29, 23.
- 即実. 1994. 一個契丹原字的弁讀. 『民族語文』1994(5): 70-71.
- 即実. 1996. 『謎田問徑 —— 契丹小字解讀新程』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 即実. 2010. 契丹小字墓誌中之漢籍典故. 中國民族古文字研究會成立 30 周年慶祝大會 (2010 年 8 月 28, 29 日, 承德) 論文.
- 即実. 2012. 『謎田耕耘: 契丹小字解讀續』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 康鵬. 2015. 白居易詩文流傳遼朝考 —— 兼弁耶律倍做白氏字號說. 『中國史研究』2015(4): 103-116.
- 劉鳳翥. 1983. 契丹小字解讀再探. 『考古學報』1983(2): 255-270.
- 劉鳳翥、于寶林. 1981. 《故耶律氏銘石》跋尾. 『文物資料叢刊』5: 175-179.
- 劉鳳翥、周洪山、趙傑、朱志民. 1995. 契丹小字解讀五探. 『漢學研究』13(2): 313-347.
- 大竹昌巳. 2015a. 契丹語の奉仕表現. 『KOTONOHA』149: 1-15.
- 大竹昌巳. 2015b. 契丹小字文獻所引の漢文古典籍. 『KOTONOHA』152: 1-19.
- 大竹昌巳. 2015c. 契丹小字文獻における母音の長さの書き分け. 『言語研究』148: 81-102.
- 大竹昌巳. 2015d. 契丹語文法研究の方法と課題 —— 当為・可能表現の解讀を例に —— (ワークショップ古代文字文獻を資料とした死言語の文法研究). 『日本言語學會第 151 回大會 予稿集』pp. 350-355.
- 契丹文字研究小組 (清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于寶麟、邢苒里). 1977. 關於契丹小字研究. 『內蒙古大學學報 (哲學社會科學版)』1977(4), 契丹小字研究專号.
- 契丹文字研究小組 (清格爾泰、陳乃雄、邢苒里、劉鳳翥、于寶麟). 1978. 契丹小字解讀新探. 『考古學報』1978(3): 353-387.
- 契丹文字研究小組 (清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于寶林、邢復禮). 1985. 『契丹小字研究』北京: 中國社會科學出版社.
- 沈匯. 1982. 契丹小字石刻撰人考. 『考古與文物』1982(6): 94-98, 83.
- 沈鍾偉. 2012. 契丹小字漢語音譯中的一個聲調現象. 『民族語文』2012(1): 39-50.
- Takeuchi Yasunori. 2015. Direction Terms in Khitan. *Acta Linguistica Petropolitana* 11(3): 451-464.
- 武內康則 [編]. 2015. 『豐田五郎契丹文字研究論集』京都: 松香堂書店.
- 豐田五郎. 1985. 契丹小字 𐰺 の新解釈について. 『京都産業大學國際言語科學研究所所報』7(1): 47-50.
- 豐田五郎. 1986a. 契丹小字についての幾つかの探索 I. 1986 年 10 月 8 日付手稿 [武內 [編] 2015: 301-305].
- 豐田五郎. 1986b. 契丹小字についての幾つかの探索 II. 1986 年 11 月 11 日付手稿 [武內 [編] 2015: 306-310].

- 豊田五郎. 1990. 契丹小字の方位と若干の数詞について. 1990年11月付手稿 [武内〔編〕2015: 314–317].
- 豊田五郎. 1991a. 關於契丹小字的幾点探索. 『内蒙古社会科学』1991(3): 105–114 (那順烏日 函訳).
- 豊田五郎. 1991b. 契丹小字《仁先 (即実本) 墓誌》の新釈. 1991年4月29日付手稿 [武内〔編〕2015: 318–325].
- 王弘力. 1984. 对《契丹小字字源举隅》的幾点商榷. 『民族語文』1984(3): 67–69.
- 王未想. 1999. 契丹小字《沢州刺史墓誌》残石考釈. 『民族語文』1999(2): 78–79.
- 吳英喆. 2012. 『契丹小字新発見資料釈読問題』. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Wu Yingzhe & Juha Janhunen. 2010. *New Materials on the Khitan Small Script: A Critical Edition of Xiao Dilu and Yelü Xiangwen*. Folkestone: Global Oriental.
- 趙志偉、包瑞軍. 2001. 契丹小字《耶律智先墓誌銘》考釈. 『民族語文』2001(3): 34–41.